

主 題：偉大な創造主

聖書箇所：詩篇 8 篇

テーマ：偉大な創造主に心からの礼拝をささげること

詩篇 8 篇 指揮者のために。ギテトの調べに合わせて。ダビデの賛歌

- 8:1 私たちの主、【主】よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたのご威光は天でたたえられています。
- 8:2 あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。それは、あなたに敵対する者のため、敵と復讐する者とをしずめるためでした。
- 8:3 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、
- 8:4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。
- 8:5 あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。
- 8:6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。
- 8:7 すべて、羊も牛も、また、野の獣も、
- 8:8 空の鳥、海の魚、海路を通うものも。
- 8:9 私たちの主、【主】よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。

主に心からの礼拝をささげること、それは私たちに与えられた最も大切な責任であり、すばらしい特権です。日曜日にこうして集まる時も、また、日々の生活にあっても私たちはどんなときにもどこにあっても主のすばらしさを覚え感謝し、この方を誉め称える者として今を生かされています。私たちは私たちの態度も振舞いも思いもことばも、私たちのすべてをもって主の栄光を現す者として造られました。イザヤ書 43：7 に「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」と書かれている通りです。私たちは主に心からの礼拝をささげるのです。

皆さん、先週一週間を振り返ってみてください。それぞれ責任や課題、難しさやチャレンジを受けることがたくさんあったのではないのでしょうか？大変だなと思うこと、しんどいなと思うこと、どうして？なぜ？と思うこともあったかもしれません。しかし、そんな中にあっても私たちに注がれる主のあわれみは尽きることがなかったはずです。先週の出来事を思い返したときに「主よ、感謝します。あなたはすばらしいお方です。」と言える恵み、あわれみはどれ程あったことでしょうか。どれ程の祝福が日々私たちに与えられていることでしょうか。

また、私たちを取り巻く環境は良いときも悪いときも変わり移りゆくものです。この世はそれによって振り回されています。しかし、私たちの主の愛、主の恵み、知恵、力、主の栄光は決して変わることはありません。そして、そんな主が私たちとともにいてくださる。決して変わることはない主があなたと今日ともに歩んでくださっている。どんな時も信頼しながらこの主に従って生きていくことが出来る。皆さん、このことを考えるだけでも私たちにはどれ程の感謝でしょうか？だからこそ、主のあわれみや主の存在を知識としてだけでなく、実際に味わっていた者たちはみな、主を愛し心からの礼拝をささげることが己の喜びとしていました。

今日私たちが見る詩篇 8 篇を記したダビデも同じ詩篇 27：4 でこのように言っていました。「私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」と。ダビデにとって彼の人生で最も大切だったこと、それは「主を礼拝すること」でした。いつまでもどんなときも主のすばらしいみわざを誉め称えたい。これが彼がもっていたただ一つの願い、何よりの望みだったのです。

さて、皆さんの多くはこのことを知って「確かにその通りだ」と思われたでしょう。主の溢れんばかりの恵みを覚えるときに、主に心からの礼拝をささげることこそが自分にとって最も大切な責任だと、そのように信じておられると思います。では、実際はどうでしょうか？私たちが日々の生活を振り返ったときに、そのような責任に対して忠実に歩むことができているのでしょうか？毎日の生活において主のすばらしさを覚えて感謝をささげ続けて生きているのでしょうか？

今日、私たちはこのようにこの御堂に集まって来ました。また、ライブを見ておられる皆さんもその場において礼拝をささげています。皆さんは今心からこの主に礼拝をささげているのでしょうか？私たちの心をご存じの神が今ひとり一人の心のうちをご覧になられるのなら、この主は喜んでくださるでしょ

うか？それとも、悲しまれるでしょうか？私たちが正直に告白するなら、私たちはときに礼拝することにおいて難しさを覚えることがあります。静まって心を落ち着けて主を賛美しようと思っても、携帯にラインやメールの通知が入りそれが気になって集中できないことがあります。礼拝を形だけもっていても、頭の中には礼拝後の予定を考えていたり、また、別のことに気が取られているかもしれません。私たちは私たちの周りに溢れている様々な誘惑によって心が乱され、主に心が向いていないことも経験するのです。家事や仕事などやるべきことに追われ忙しさの中で主との時間をないがしろにしてしまうこともあるかもしれません。

また、試練や苦しみの中に置かれて心が恐れや不安でいっぱいになっているとき、「主は自分を見捨ててしまわれたのではないかと」と、そんな疑念が心を支配するとき、私たちは主に心からの賛美ではなく不満を口にしていくかもしれません。また、先週一週間を振り返って、何か主の愛やあわれみが自分にとって当たり前かのように思われて感謝することを忘れてしまうこともあったりするのです。

私たちはいろいろなものに心が捕らわれて、本当に大切なことに私たちの目が向いていないことがあります。悲しいことに、私たちはみなこのような弱さをもっていたりするのです。主に心からの礼拝をささげることは大切だ、主にもっと賛美をささげる者として成長していきたい、そのことは分かっているけれど実際は難しい…と、もし、今そのように思う方がいるなら、今、主に心の目が向いていないのなら、今日見る詩篇の8篇は、そんなあなたに大切なレッスンを教えてくれています。

ダビデはこの詩篇を通して、主のすばらしさ、特に創造のみわざにおける主の偉大さについて明らかにしています。そして、その中で私たちは特にこの主に心からの礼拝をささげる上でふさわしい二つの態度を見ることが出来ます。今からそのことを見ていきますが、皆さん今一度、私たちが礼拝をささげている神がいったいどれ程偉大なお方なのか、また、この偉大な神に比べて私たち人間はどのような者なのか、そのことをよく考えてみましょう。また、このみことばを通して今一度皆さん、心の中を吟味してください。正しい態度で主を礼拝しているのか？と。主を礼拝することが私たちひとり一人にとってどれ程すばらしいことなのか、そのことをごいっしょに考えていきましょう。今日見る真理が、主に喜ばれる礼拝者として私たちひとり一人が成長していくその助けとなることを祈っています。

## ○心からの礼拝をささげるのにふさわしい二つの態度

### 1. 創造主の偉大さをどんなときも認めること 1-2節

言い換えれば、私たちが主の前に正しい礼拝をささげるためには、主の偉大さすばらしさをどんなときも忘れてはならないということです。1節「私たちの主、【主】よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたのご威光は天でたたえられています。」、ダビデはここで主の御名、栄光が世界中のあらゆるところで明らかであるということを誉め称えています。ここで皆さんに気付いてほしいことは、ダビデが「主」ということばに二つの異なることばを用いていることです。

1) 「ヤハウエ」 : 皆さんの聖書では太文字で表されている「主」です。これは「神は聖いイスラエルの契約の神である」ことを表すのに用いられている神の名前です。このことを思い返してください。出エジプトにおいてエジプトの地から民を連れ出すようにと命じられたモーセは、神にこのように尋ねました。出エジプト記3：13「モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」、モーセは神に質問したのです。そして、その神の答えが次の14節に記されています。3：14「わたしは、『わたしはある』という者である。」と。この『わたしはある』という名前こそがモーセに対して、また、イスラエルの民に対して明らかにされた神の名前でした。この『わたしはある』という名前にはいろいろな意味があります。たとえば、この神は昨日も今日も明日も決して変わる事のない永遠の神であること、また、この神は自分以外の何も必要としないこと、何か他のものに頼ることのない自存の神であること、また、聖く正しい誠実なお方であることも意味しています。ダビデはこのように様々な性質をもった偉大な神「ヤハウエ」に心を向け賛美をささげていました。彼は自分の誉め称えている神がどのようなお方なのかをよく分かっていたのです。彼は自分が礼拝している主が自分と個人的な関係にある、人の理解をはるかに超えたすばらしいお方であることを認めていました。だからこそ、彼は主に心からの礼拝をささげていたのです。しかし、ダビデはこの主が自分にだけ関係のある神だとは言っていません。

2) 「アドナイ」 : こう言っています。「私たちの主、」と。二つ目に彼は「アドナイ」ということばを主に用いています。「私たちのアドナイ」と。この「アドナイ」ということばは「主は主権者、王であること」の意味で聖書に用いられています。要するに、ダビデはここで自分の礼拝する神が自分だけのものではなく、神の民全体にとって偉大な力をもちすべてを支配されている主権者であることを言い表しているのです。ダビデは自分の神がどんなお方かをよく知っていました。そして、この神が自分のものだけでなく私たち全員にとっての神であることもよく分かっていたのです。私たちの礼拝する神

は偉大な栄光にあふれた王であると。

さて、このことを分かった上で主に向かってダビデはこのように賛美を続けています。「あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたのご威光は天でたたえられています。」

○あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう : 「御名」とは「神のご性質、存在そのもの、また、力」を表すことばです。そして、「力強い」は「神の力、存在が見える形ではっきりと現わされている」という意味です。言い変えると、主の偉大さ、圧倒的な主の力、人知をはるかに超えた主の知恵、それらはすべてこの地上において被造物を通してはっきりと示されているということです。主のすばらしさはすべてのものに目に見える形でもうすでに明らかにされているのです。そのことをダビデはここで言っています。しかし、もちろんここでダビデは必要なことだけを指して言いません。続けて、このように言っています。

○あなたのご威光は天でたたえられています : 要するに、この主の栄光、主のすばらしいご性質は地上だけでなく天においても明らかだということです。私たちがよく知っている詩篇19:1には「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」とあります。ですから、ダビデがここで言わんとしたことをまとめるなら、私たちが主の造られた被造物を見るとき、それが地上であっても天であっても、そこには神の偉大さがはっきりと現わされているということです。この事実が余りにも明白だからこそ、私たちのだれ一人としてこの事実を否定する者はいないのです。恐らく皆さんも、ここでダビデが感じている思いを味わったことがあるでしょう。私たちが自然界を見るときにそこに人の考えや理解が及びもつかないものが存在していることを見るのです。

私たちが住んでいる地球は太陽に近すぎず遠すぎない位置にあって公転し続けています。もし、少しでも近ければ私たちは熱くて住めなくなります。もし、遠ければ寒くて住めないでしょう。それらすべてのことが変わることなくいつも回り続けているのです。また、天体のことだけでなく、私たちの周りを見ると季節ごとに花や実を实らせる植物を見ることが出来ます。また、動物や魚を見ても、だれに教えられたわけでもないのに生まれた川へと戻って来る鮭がいたりします。私たちが自然界を見るときに、数限りなく私たちが説明できないすばらしいわざが明らかにされています。植物を見ても動物を見ても、空の星や月や太陽を見ても山や川を見ても、この世界のどんなものでもその被造物の中にはそれらを造られた神の知恵をはっきりと見て取ることができるのです。主の偉大さは明白にこの世界に溢れていると、そのことをダビデはここで教えています。

そして、彼は主の偉大さについて語った後にその説明を加えています。2節「あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。それは、あなたに敵対する者のため、敵と復讐する者とをしずめるためでした。」、ここで急に、「幼子」「乳飲み子」「敵」「復讐する者」ということばが出て来ていますが、いったいダビデはここで何を言わんとしたのでしょうか？ここを理解するうえでカギとなるのは「幼子」「乳飲み子」という存在がどのようなものかということです。「幼子」とは大体小学生位の子どものことを指しています。また、「乳飲み子」とは2～3歳位の子どものことです。皆さん、少し考えてみてください。この年代の子どもはいったいどのような存在でしょうか？もちろん、この年齢の子どもたちは一番可愛かったりしますが、もしくは、そろそろ悪さをし始める頃になって手に負えない時期かもしれません。

いろんな特徴があるにしても総じて言えることは、この年代の子どもたちはまだ親の助けが必要な弱い存在だということです。彼らは親がいなければ何もすることができない存在です。また、彼らが口のことばはどうでしょう？小学生ならある程度は話せるでしょうが、2歳児はどうでしょう？彼らが話すことを理解できますか？多分、母親以外は理解が出来ないでしょう。ここでダビデが「あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。」と言ったこと、これはこんなにか弱い簡単なことしか口に出来ない子どもを用いて、主はご自分の力を明らかにされるということです。弱くだれかに頼ることでは生きていけない子どもを用いて、この偉大な主はご自分に敵対する者に勝利することが出来ると言うのです。

この箇所を理解するために、この詩篇8篇を引用して語られたイエスのことばを見てみましょう。マタイ21章です。ここでは受難週の初めにイエス・キリストがエルサレムに入城される様子が記されています。入城されたイエスはそのまま宮へと入って行かれますが、そこからの様子が12-16節にこのように書かれています。「:12 それから、イエスは宮に入って、宮の中で売り買ひする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。:13 そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」:14 また、宮の中で、盲人や足のなえた人たちがみもとに来たので、イエスは彼らをいやされた。:15 ところが、祭司長、律法学者たちは、イエスのなされた驚くべきいろいろなことを見、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言って叫んでいるのを見て腹を立てた。:16 そしてイエスに言った。「あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか。」イエスは言われた。「聞いています。『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あな

たがたは読まなかったのですか。」、ここに見る通り、祭司長や律法学者たちは腹を立てていました。子どもたちはイエスが宮の中に入って来てその中をきれいにされる様子、それだけでなく、盲人や足のなえた人たちを癒される様子をよく見ていました。子どもたちは目の前でイエス・キリストの奇蹟のみわざ、力のみわざを目撃したのです。だから、彼らは分かったのです。このイエスこそ約束されている救い主、神なのだ。ゆえに、この主を受け入れてこの方を誉め称えて「**ダビデの子にホサナ**」と歌っていたのです。

一見か弱く頼りないような幼い子どもですが、彼らは素直に救い主を受け入れることができたのです。しかし、残念ながら、頭の賢い律法に熱心な祭司長や律法学者たちはこの肝心なことを理解することができませんでした。彼らは同じように目の前で奇蹟が行われているのを見たにも関わらず、救い主を信じることができなかつたのです。だから、イエスは詩篇のことばを引用されたのです。「『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。」と。幼くか弱い子ども、彼らは真理を素直に受け入れました。そして、プライドの高い頑なな大人は救いを受け入れることがなかつたゆえに、その結果さばかれていくのです。

ここで私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちの主は、弱さを覚えていても子どものように素直に従う者を大いに用いられるということです。主は弱い者を用いられる、そのことはパウロもコリント人への手紙の中でもこのように言っています。Iコリント1：27-29「27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」、主は子どものように素直で弱い者を用いられるのです。

では皆さん、私たちが自分自身の歩みを振り返ったときに、今まで見て来ましたが、私たちは今この主の前にどのような歩みをしているのでしょうか？ダビデは自分の仕える主がいつまでも変わることはない誠実な神「ヤハウェ」であることを覚えこの方を誉め称えていました。では、私たちはこの主がいつまでも変わることはない誠実な神であると、どんなときも認めてこの方を誉め称えているのでしょうか？自分には理解できないようなことがあっても、大丈夫！私の主は変わらず私に誠実でいてくださる、だから、そのことを感謝しようと、そのような感謝をささげているのでしょうか？それとも、自分の置かれている状況に振り回されて、変わることはない主への信頼を忘れてしまっていないのでしょうか？

また、ダビデは自分の仕える主がすべてのことを支配されている主権者「アドナイ」の神であることを覚えて、その方を誉め称えていました。では、私たちはこの主がすべてのことを支配されている主権者アドナイであることを覚え、その方を誉め称えているのでしょうか？どんな状況に置かれても大丈夫だ、自分の主はこんな状況も支配されている、だから、この主に感謝をささげようと、そのような歩みをしているのでしょうか？それとも、自分には理解できないこと、手に負えないことが起こった時には「ああもうだめだ！」と、この主を忘れてしまっていないのでしょうか？

ダビデは、この世界には神の力がはっきり示されていると、そのことを覚え神の栄光をいつも心に留めてこの神に賛美をささげていました。私たちはどうでしょう？私たちの周りにはあふれんばかりの主のすばらしいみわざを見ることが出来ます。そのことに心を留めて感謝をもって日々を歩んでいるのでしょうか？それとも、それらには目もくれず主以外のものに関心を向け、それらが自分にとってすばらしいものであるかのように探し求めて、主を忘れてはいませんか？

また、偉大な主の力は、幼子の例で見たように、弱い者を強めて主のために大きな働きができるようにと助けてくれるものです。私たちは自分には手に負えない自分は無力だと感じる時にこそ、私たちにとって最も十分な主の力に信頼して歩むことができるのです。こんなすばらしい主の力により頼みながらすべてのことを為していこうと、そのように歩んでいるのでしょうか？それとも、自分の知恵や力、自分の考えに頼って、あたかも自分には何でもできる、このことに関しては自分にはできると、そのように主を忘れてしまっていないのでしょうか？

皆さん、私たちが主を礼拝するときに覚えておくべき大切なこと、それは「私たちの主の偉大さ」です。私たちの主は偉大なお方だと、そのことをいつも覚えておくことです。

## 2. 創造主のあわれみを感謝すること 3-8節

礼拝をささげるのにふさわしい態度の二つ目は「創造主のあわれみを感謝すること」です。3-8節で、特に、私たちに対する主のあわれみに関して二つのことを見ることができます。

### a) 創造主は人を心に留めてくださる 3-4節

この世界を造られた創造主がいかにすばらしいかを1-2節で見たダビデは、そんな偉大な神と人とを対比しています。3-4節「3 あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、

:4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」、これを記したダビデのこのときの歴史的背景はよく分かっていません。ある人はこれは彼が王であったときに記したのではないかと考えています。また、彼が羊飼いと夜番をしていた時に書かれたのではないかと考える人もいます。しかし、それがどんな時であってもこの3節を読んでいるダビデの様子、気持ちを私たちは容易に想像できます。夜、彼が空を見上げた時に、そこには月や星が空一面に広がっていました。ダビデはその光景の余りの美しさ、光の輝き、広大さに目を奪われてこう思うのです。「偉大な創造主だ！私の主は偉大な創造主だ。造られたもの何とすばらしいことだろう！」と。それと同時に、彼は自分のことも見るのです。そして、その偉大な主と自分を比べて「人とは、何者なのでしょう。」、「人の子とは、何者なのでしょう。」と言います。

ここで使われているこの「人」「人の子」ということばはどちらも「私たちの人としての弱さ、またはかなさを表すことば」として用いられています。ダビデが見上げた空、彼はそのすばらしさに自分を比べて、自分自身がいかに小さく無力な存在であるかに改めて気付いたのです。「偉大な主だ！そして造られたものはすべてすばらしい！」と。それに比べて自分はちっぽけでこの神に対して取るに足らない存在だと、そのことを彼は覚えたのです。

しかし、ダビデは単に神の偉大さと自分の無力さに驚いただけではありませんでした。「人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」と。彼は不思議だったのです。こんなに小さな何の価値もない自分を偉大な創造主は覚えてくださっている、その事実には彼は驚いたのです。力ある神が、こんなすばらしい、考えられないほどのものを造られた神が自分のことを覚えて助けや必要をいつも与えてくださる、なんとすばらしいことか！ダビデはそんな主のあわれみを覚え、そして、この主に感謝をささげていました。

そして、さらにすばらしいニュースはこのダビデにとっての主は今の私たちにとっても同じ主だということです。私たちのこともこの主は心に留め、あわれみを示してくださるお方だということです。マタイ10:29-31に「:29 二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。:30 また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。:31 だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。」とあります。この世界を創造され支配されている神が私たち一人ひとりのことを覚え、そして、私たちに必要なものを与えてくださる。この世界の創造主が私たちのことをいつも心に留めてくださっていると、そのように詩篇は教えてくれているのです。

では、私たちはこの主のあわれみに対してどのように向き合っているのでしょうか？この主に対して、私たちはダビデのように感謝をささげているのでしょうか？私たちに心を留めあわれみを示してくださっているこの主に対して心からの賛美をささげているのでしょうか？それとも、主が多くのもので与えられているにも関わらず、そのことを忘れ、あたかも自分の力で得たかのように振る舞ってはいないのでしょうか？また逆に、自分の必要を満たしてくださらない、自分の願いを自分の望むタイミングで聞き入れてくださらないと不平や不満を心の中に抱いていないのでしょうか？

皆さん、覚えておかなければいけないことは、私たちの主は私たちが望むものではなく、私たちに一番必要なものを与えてくださるお方だということです。私たちのすべてを知っておられる方、私たちが造られたお方は私たちに最も必要なものを必要なタイミングで与えてくださるお方です。この世界をことばだけで造り、また、すべてのものをご自分の意志のままに支配されているお方が、あなたのことを心に留めてくださっているのです。あなたのことをいつも忘れないであわれみを注いでくださっているのです。皆さん、感謝なことではないでしょうか！だからこそ、私たちの責任はこのあわれみ深い主に感謝をささげ続けることです。

#### b) 創造主は人を特別な存在として扱ってくださる 5-8節

5節「あなたは、人を、神よりいっくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。」、この箇所は訳すことが難しく、皆さんの聖書の欄外には別訳として「御使い」、また「足りなくする」という補足が書かれています。新改訳2017年度版では「あなたは 人を御使いよりわずかに欠けがあるものとし これに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。」と訳されています。「神」ではなく「御使い」と訳しています。なぜ、そのような違いが生じるのでしょうか？ここで用いられている「神」、「エローヒム」ということばは「御使い」とも「神」ともどちらにも訳すことができます。ですから、ここを「神より」、あるいは「御使いより」と訳していても間違いではありません。但し、基本的にこの「エローヒム」ということばは「神」と訳されることが多いので「あなたは、人を、神よりいっくらか劣るものとし、」が一般的です。

ダビデがここで言わんとしているメッセージはシンプルです。私たちに明白なことです。それは神は私たち「人」という存在を神よりいっくらか劣ったものとして特別に造られたということです。神は人

を特別に造られたのです。神は私たちを野の獣より少し優れたものとして造ったわけではありません。私たちが特別に造り、そして、その私たちに「**栄光と誉れの冠をかぶらせ**」てくださったのです。そのことは創世記 1 : 26、27 に神がいかに私たちが特別に造ってくださったかを見ることができます。「**26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」**」**27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」**と。ここに私たちは「**神のかたちとして創造された**」と書かれています。もちろん、「**神のかたち**」といっても神が肉体を持っておられるということではないことは明らかです。なぜなら、私たちが知っている通り「**神は霊だから**」です。ヨハネ 4 : 24 に「**神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。**」と書かれています。

では「**神のかたちとして造られた**」とはいったいどういうことなのでしょう？もちろん、これにもいろんな考え方、意味がありますが、簡潔に言うなら「**私たちは創造主なる神と関係を持つ者として特別に造られた**」ということです。神は私たち人間を特別に造って下さいました。だからこそ、人間だけが主に礼拝をささげることができるのです。人間だけが祈ることができるのです。ただ人間だけが主のみことばに従いこの主の栄光を現すことができるのです。私たちはこのようにして主に仕える者、主の栄光を現わす者として造られました。神のかたちとして特別に目的をもって造られたのです。だからこそ、今の社会が教えているような進化によってできたわけではありません。聖書が教えることは明白に、私たちは創造主なる神によって目的をもって造られたということです。

また何より、神は特別に造った人間にだけ、この地上に住むすべてのものを支配する特権をもお与えになりました。6-8 節にこのように続いています。「**6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。7 すべて、羊も牛も、また、野の獣も、8 空の鳥、海の魚、海路を通うものも。**」、地のちりから造られた私たちに、神はこの地上のすべての生き物を支配するという特別な責任を与えられたということです。創造の初め、私たち人間には羊も牛も野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を通うもの、この被造物すべてを支配するという責任が与えられたのです。それが創造の初めの私たちの責任だったのです。

ここ迄聞いて来て、不思議に、疑問に思われている方がおられると思います。今の世界、私たちの周りを見渡してみても、そのようなことは起こっていないからです。生き物が人に従っているようには思えない。まさにその通りです。残念ながら、神が造った完璧な世界はアダムとアバが罪を犯したことによって、神に従うよりも自分の思いに従うように、サタンに騙され従ったことによって崩れ去ってしまったのです。罪がこの世界に入ったことによって、私たちは本来主に仕える者、主の栄光を現すというその目的のために造られたにも関わらず、自分の生きたいように自分の栄光を求めようと、自分が中心の生活になってしまったのです。罪が入ったことによって、神との関係もねじれてしまい、私たちの身に死が振りかかり、そして、罪によって永遠の罰が、私たちには罪の罰として必ず永遠のさばきを受けなければいけないという、そのような結果がこの世界に入ったのです。

だれ一人としてこの罪の問題を解決することはできませんでした。人間はだれ一人として罪の問題にふさわしい解決策を提示することもできませんでした。しかし、その問題を解決するたった一つの方法があったのです。それは、神がご自身のひとり子であるイエス・キリストをこの地上に送って下さることでした。私たちのために驚くべき愛を示し、そして、イエス・キリストがこの地上に来てくださったのです。この詩篇を引用している箇所がヘブル書の中に記されています。2 : 6-9 をご覧ください。「**6 むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。「人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょうか。人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょうか。7 あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、8 万物をその足の下に従わせられました。」**万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはなりません。**9 ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見ています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」**と。

イエスはご自身が神であるにも関わらず、私たちが愛し私たちのためにへりくだってこの地上に来て下さいました。そして、十字架の上で死に三日目によみがえることによって、私たちに罪の赦しを永遠のいのちを備えて下さったのです。この主の救いのみわざによって私たちは新しく生きていくその祝福が与えられるのです。私たちはこの主の救いによって再びこの主に栄光を帰す者として、主に仕える者として、主のみことばに従って主の栄光を現わす者として生きていくことができる者に変えられたのです。私たちはだれ一人としてこれに値する者ではありませんでした。主の愛に値する者なんていなかったのです。しかし、神の一方的な愛によって、神は私たちが愛して下さり、この先も偉大な主と

ともに永遠に主を賛美する、その特権さえも与えられたのです。

このお方に対して、こんなすばらしい約束を祝福を与えてくださったこの主に対して私たちはどのように応答すべきなのでしょう。この詩篇は最後にこのようなことばで終わっています。9節「**私たちの主、【主】よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。**」と。主の偉大さを見たダビデは、主の偉大さと自分の小ささ無力さを知ったダビデは、何よりもこの主のすばらしさを誉め称えること、この主に栄光を帰すること、いつもそのことを願ってそのことを覚えて歩んでいました。私たちも同じことができます。同じように、この主の偉大さを知った私たちは、この主にいつも感謝をもってこの主を心から礼拝する者として生きていくことができるのです。そのことが私たちに与えられた責任であり特権なのです。

さて、今朝は主に心からの礼拝をささげるそのときにふさわしい二つの態度を見て来ました。皆さんどうだったでしょう？ひとり一人自分の心を吟味して考えてみてください。自分はふさわしい態度をもってこの偉大な創造主に礼拝をささげているのだろうか？と…。

もし、まだこの中に神を知らないと言われる方がおられるなら、聖書が私たちに教えてくれていることはローマ1：20に書かれています。「**神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。**」と。これまで詩篇8篇を見て分かったように、私たちが周りの被造物を見渡せば、そこに神がおられるということを私たちは知っているのです。だからこそ、私たちが神の前に立った時に「私はそんなことは知りませんでした」と弁解できる人はだれもいないと言うのです。だからこそ、今まだこの時間がある時に、この主の偉大さを見て取ることができる時に、自分の罪を悔い改めて、救い主イエス・キリストを信じてこの主のために歩んでください。

また、益々主を礼拝する者として成長していきたいと思われている皆さん、主の偉大さを覚えることです。そして、主のあわれみを感謝し続けることです。ともに主を礼拝する者として成長していきましょう。